
天 気 雨

j

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天 気 雨

【Nコード】

N1391G

【作者名】

j

【あらすじ】

天気が雨の時はキラキラな太陽が出る事はないのに、どうしてそこまで私をキラキラな太陽みたいに笑わせたいの？君の考え、分かんないよ……。でも、本当は……。それより、悩んだり、悲しんだり、苦しんだりしてるときに頭に出てくるのは、太陽くんだけだったよ……。

どしゃ降り

今日は、雨が降ってた。

「あつ・・・降ってる。」

自分の部屋の窓に手について空を見ている少女の名は、【空内^{そらうち} 雨^{あめ}】
内気な高校1年生。
名前のとおり、雨が好き。

「よかった。

いい音だなあ・・・。太陽なんかより、雨のが全然いいや。」

2

少女は、短くて黒い綺麗な髪をとかしながら、学校に行く準備をはじめた。

「・・・行つて来ます。」

少女は小さな声でそう言つと傘をさして、雨の中一人、歩きだした。

10分程で学校についた。

教室に入ると同時にチャイムが鳴った。

先生が入ってきた。

「今日は、転校生のイケメンくんが来てるぞ！どうぞ。」

皆がざわめく中、一人の男の子が教室に入ってきた。

「どーも。【空間 くうま 太陽 たいよう】です。
よろしく。」

その少年は、本当にかっこよく、茶色い髪の毛がよく似合っていた。

「・・・私と正反対なタイプそうだな。」

雨がそう呟くと、太陽は雨の方向にきた。

「そんなのまだ分かんないじゃん？
もしかしたら、俺も君と同じかもしれないしさ？」

太陽は笑いながら雨に言った。

しかし、雨が言い返した。

「私と・・・同じじゃないよ。
あなたは。」

その瞬間、先生が入ってきた。

「話はそこまで。
ほら、席つけー。」

雨は太陽の方向を見ると、太陽は雨に、なんで？と訪ねるような顔をしている。

その顔を見て、雨は心の中で思った。

（君が、空に浮かぶ太陽みたいにキラキラわらうから・・・。

天気が雨の日は、もう晴れにはならないんだよ。
・・・私と君と同じで。私は、空に浮かぶ太陽みたいにキラキラ笑えないよ。）

雨はまた、学校の窓から空を見上げた。
やはり、雨が降っていた。

雨は小さな声で呟いた。

「ほら・・・。

私と君は似てない。

だって、空に浮かぶキラキラな太陽が、黒いモヤモヤした雨にはなれないから。

もちろん、モヤモヤした雨がキラキラな太陽になることも・・・。」

その後も、雨はやまずに降っていた。

そしてやっと、帰りの時間になって、傘をさした。
すると、後ろから太陽が走ってきた。

「ねー！！

雨ちゃん！

さっきの質問の答え、教えて？」

「・・・絶対にやむ雨はないんだよ。
雨がやんで太陽が空に上がる事はないの。
私は、太陽くんみたいになれないから。」

「あるよ。」

やむ雨はある！

太陽が出てきて、虹も出る。」

「虹・・・。」

「じゃあ俺が雨ちゃん虹になつてあげるよ。
雨が、太陽に変わる為の掛け橋にさ。」

その時、雨の心は少し揺れ動いた。
でも、本当に少しだけ。

一人ぼっち

その日、雨は走って家に帰った。

部屋の中で雨は独り言を言っていた。

「なんであんなに太陽みたいに笑えるの・・・？
私もあんなふうになりた・・・駄目、なれないよ。」

次の日、朝になって雨が起きると、外は晴れていた。

「・・・晴れてる。」

学校、行きたくないな・・・。
晴れてるし、つまんないし、友達だっていないし。
でも、行かなきゃね・・・。」

雨は、嫌々ながら制服に着替えて家をでた。

学校に行く道の途中、何人もの生徒が通るが、雨に話しかけてくる生徒はいなかった。

そしてやっと、学校についた。

すると、すぐに太陽がちかずいてきた。

「今日は晴れたね。
晴れの日って気持ちいいよなー？」

「私は、晴れの日より、雨が降ってる日のが好きだから。
別に、私の事おかしな奴って思ってもいいよ……。」

「そんな事思わないよ。
だって俺、雨の日も好きだからさ。
天気雨が降ればいいのにな。」

雨は首をかしげた。

「天……気雨？」

「天気雨ってのは、晴れてるのに雨が降る、おかしな天気のこと。
まあ天気雨なんて毎日毎日、降るわけじゃないから、運がよければ
天気雨になるな。」

「虹も・・・出るの?」

「もちろん、虹も出る!!」

だから俺は、天気雨になってほしいんだ。」

「なんで?」

「雨ちゃんに見せてあげたいなー、と思ってさ。」

雨は少し戸惑いながらも、はや歩きで歩き出した。

「あつ、ちょっと、はやいよー、雨ちゃん!」

そして、雨はやっと学校についた。

教室に入っても、友達はいない。
それどころか嫌われてる始末。

雨はそんななか呟いた。

「また皆に避けられてる・・・。
別に、いいけど・・・。」

しかし、雨は寂しかった。

一人ぼっちが、怖くて怖くてたまらなかった。だから、学校にだつて行きたくなかった。

その時、太陽が話しかけてきた。

「ねえ雨ちゃん、一人で座ってないで遊ぼうよ！
皆でさ。」

「いいよねー！？皆ー！！」

「えー、空内いるのかよ。
じゃあ俺遊ばねー。」

皆の反応は雨を嫌っているのが分かる反応だった。

「太陽くん、いいよ。私、一人ぼっちでも・・・大丈夫だから・・・
さ。」

すると一人の男子が言った。

「おい太陽ー！
空内大丈夫って言うてるんだし、遊ぼうぜー！！先に行ってるから
はやく来いよー！」

「悪い！！
やっぱり俺遊ばねーや。」

雨は驚いた。

「・・・遊んでこないの？」

「んー？
だって、雨ちゃんと話してるのがなんとなく好きなんだよね。
俺と合うってゆーかさ。」

「でも私・・・暗いし。」

雨がそう言つと太陽は腹をかかえて笑いだした。

「あははははっ！！！！！！

なーに言っ てんの雨ちゃん！
まあ俺は可愛いと思うよ。」

雨はすごく焦った。

「か、からかわないで・・・。」

「あはは、ごめん、ごめん。」

雨は何故か、日がたつことに太陽の笑顔を見ると、心が苦しくなる
ようになっていた。

後悔

太陽の笑顔を見ると、心が苦しくなりはじめてから、もう一週間が過ぎようとしていた。

雨は一人、日曜日の空をただながめていた。

「こんなに・・・こんなに青くて綺麗な空なのに、どうして私はこの空を受け入れられないんだろう・・・。」

雨は、いつも自分をせめるばかりだった。
何かあると、すぐに自分の中の弱さを出す。

「私は弱い・・・。
逃げてばかり。」

最後の最後は、必ず私は太陽くんから逃げてるはず・・・。
太陽くんの笑顔さえ、もう見えないよ・・・。
痛いよ・・・苦しいよ・・・うらやま・・・しいよ・・・。
「

すると突然下の部屋から大きな音と声が聞こえてきた。

「・・・まただ。」

雨がしたにおりていくと、父親が母親に何かを言ってる。

「俺は、自分の食いたい物も自分で買わなきゃいけないのか！？
チッ！俺には楽しみのひとつもねえのかよ！？」

父親は、母親に怒鳴りつけていた。

それを母親は涙をこらえて聞いていた。

雨は、すぐに母親が泣きそうな事がわかった。

雨には、それがストレスになっていた事に気が付いた。

父親はパチンコにはまり、お金を全て使ってしまった、母親は自分を失ってしまったように前より食事も充分にとらなくなり、物静かになってしまった。

雨は、また自分の部屋に戻って行った。

雨は、自分の部屋で横になり、いつも泣きながら家族がばらばらになることを考えていた。

「お父さん、お母さん、お兄ちゃん……。いつ、バラバラになっちゃうのかな……？」

そんな時に、雨の頭の中には、太陽の笑顔が浮かんでくる。

「なんで？」

なんで太陽くんは私の頭の中まで入ってくるの！？

どうして私を太陽みたいに笑わせたいの？君の考え、わかんないよ・
・・。」

雨の頭に出てくるのはいつも太陽だけだった。いつもいつも、頭の中で太陽が雨に笑ってと言っている。

次の日、雨が学校に行くと、いつも近ずいてくる太陽は近ずいて来なかった。

その代わり、一人の黒髪でかっこいい系の男子が雨に近ずいてきた。

「そ、空内さん、おはよう。」

「おはよう・・・。」

何・・・？」

「あつ、俺ね【天上 青】（てんじょう あお）って言うんだよ。それでさ、突然なんだけど・・・空内さんの事好きなんだよね。んで、仲良くなったら付き合ってほしいんだけどさ・・・。」

雨は少し戸惑ったが、何故か太陽の方をみた。
すると太陽は少し寂しそうな顔をして下を向いていた。

「いいよ・・・。」

その瞬間、雨が出した答えに太陽は、はっとしたように雨の方を向いて、また寂しそうに下を向いた。

「まじで！？
やったー！！

じゃあ早速だけど、雨って呼び捨てにするね！」

青は嬉しそうに雨に話しかけるが、太陽は下を向いて、周りで見て
いる女子は雨をにらんでいた。

雨は、家に帰るまで、青と手をつないで帰った。

雨は家に帰ってきて思った。

「・・・何やってんだろ私。
好きでもないのに、いいよ、とか、なんであんなこと言ったんだろ。」

雨は急に自分に後悔してきた。

「ああ、私、本当に何してんの？
私、本当は太陽くんが好・・・違う。
そんなんじゃない。」

雨はゴロンと横になって、そのままゆっくり目を閉じて、眠りに落ちた。

夢の中では、もう一人の雨がいた。

もう一人の雨はニヤニヤしながら話しかけてきた。

「ねえ、なんであんたが天上くんにいいよって言ったか教えてあげようか？」

本物の雨は聞いた。

「えっ！？
教えて。」

もう一人の雨は答えた。

「あんたが太陽くんの事が好きだからだよ。」

「ち、違う・・・。
違うよ！
そんなじゃない！」

「あんたは、太陽くんが好きすぎて、自分のどこかで、その事を隠して、嘘について、何度も自分をせめてその想いを忘れていた。」

「太陽くんはただの友達！！
それ以上の事は思っていないよ！
だから・・・絶対好きなんかじゃない。」

「あんたは太陽くんが好きなのに、それを忘れようと必死だった。
だから、かわりなら誰でもいいと思ったんでしょ？
青くんは、あんたにとって、恋人でもなんでもない。
ただの太陽くんの【かわり】でしょ？」

「違つよ!!」

青くんは、かわりなんかじゃない！
青くんは、私の恋・・・人。」

「じゃあ、逆にあんたは何故青くんに、いいよって言ったの!?
好きでもないのになんでよ!？」

「うるさい!!」

大声を出した瞬間、雨は夢からさめた。

しかし、雨の頭には、もう一人の自分の言葉がしっかりと残っていた。

信じたい人

雨は次の日、学校で同じクラスの雨が苦手な女子3人に呼び出された。

「何・・・？」

「何？、じゃねえだろ！？」

3人の中のリーダー的な女の子が雨をにらみつけながら怒鳴った。

「あんたさあ、調子乗りすぎじゃない！？」

太陽からも青からも気に入られてるからっていい気になってんじゃねえよ！

きもいんだよ、テメエは！！」

雨は顔色ひとつ変えずに言い返した。

「別に調子に乗ってないし、いい気になってもないよ。それに、自分がきもい事も知ってるから。」

「そこがうざいんだよ!!」
チツ、男好き女めっ!」

その瞬間、リーダー的の女子が雨の頬をおもいきり叩いた。

『バチン!!』

その時、たまたま青が通りかかった。

「なにやってるんだよ!?!」
大丈夫か?!?!雨!!」

「あつ、青!!」
くそっ!!逃げよ!!」

その時、青はリーダー的な女子の腕をつかんだ。

「待てよ。
テメエ、雨を殴っただろ。
同じ事してやる。」

『バキイ!!』

青のこぶしが女子の頬にヒットした。

「青、やめて!!」

本当は私、青が好きだったのよお!!
だから雨に手を出しちゃったの!!
お願いだからやめて!!」

雨も必死に止めた。

「青くんやめて!!」

青がはっとして腕をはなした瞬間、3人は走って逃げていった。

「あ・・・俺、なにしてたんだろ。
つい、ムキになっちゃったよ・・・。」

雨はおどおどしながら下を向いていると、青は空を見て言った。

「雨、こんな俺、怖いだろ・・・？」

雨は本当は怖いと思ったが、嘘を言った。

「だ、大丈夫だよ。」

青くんは、私を守ってくれたんだよね。」

「・・・そっか。」

しばらく二人の間には沈黙がながれたが、雨が話し始めた。

「青くん、青くんはどんな天気が好き？」

「俺は、天気は全部嫌い。」

好きな天気なんて一つもない。」

「そう・・・なんだ。」

じゃあ私、そろそろ戻るね。」

「う、うん。」

雨は心の中で考えた。

「太陽くんは天気全部が、好きだって言ってくれた。でも青くんは天気全部が、嫌いだって言ってた。」

私は、青くんと、あってないかもしれない……。」「

雨が教室に帰ると、先生は怒っていた。

さっき、青に叩かれた女子が雨に叩かれたと嘘をついて先生に言いつけていた。

「空内、職員室にこい。」

「・・・はい。」

雨は、先生の後について職員室に行った。

職員室につくと、椅子に座らされ、先生が話しかけてきた。

「空内、なんで叩いたんだ？」

「私、やってません。」

「しかし、あいつらは殴られたって言ってるぞ。」

「先生は・・・私の事は信じてくれないんですね。」

「しかしなあ・・・。」

「でも・・・いいです。」

「私が誰かを信じないかぎり誰も私を信じてくれないから。」

「・・・話が変わるが、空内には信じられる奴がいるのか？」

「いないかもしれません・・・。」

青くんと一緒に居ても信じようとは思えないし、太陽くんは、私は違う場所にいるんです。

私には絶対に届かないところに。」

「皆、一緒にいるじゃないか。

すぐ近くにいるのに、どうして手をのばそうとしない？」

「そんな勇気、私にはありません。」

そのまま雨は立ち上がり、職員室を出て教室に戻った。

教室では雨に殴られたと嘘をついた女子がクスクスしながら雨の方を見た。

「あんたを信じてくれる人なんかいないよ？あんたも誰も信じられないでしょ？

なら、あんた学校にくる意味ないから学校こなくていいんじゃない？」

雨は下を向いた。

「そう・・・そうかもしれない。
私の学校にくる意味はない。」

その時、太陽が出てきた！

「待つてよー！！

待つてよ雨ちゃん！！俺は信じるよ、雨ちゃんの事、ずっと信じる！
だから雨ちゃんも信じて！！

学校にも来てよ！

青は違うクラスだから今いないけど、今いたら、絶対、俺と一緒に
事言つてたよー！！」

雨は、初めて太陽に笑つてみせた。

「ありがとう、太陽くん。

本当はね、太陽くんがいたから、学校にこれたんだ。
私の学校にいく理由は太陽くんだったよ。

でも、今は違う。

なくなっちゃったよ。学校にいく理由。

太陽くん、私は君を信じてたけど、もう信じなくていいよ。

これ以上、君に、そんな雨が降つたみたいな悲しい顔、させたくないから。

バイバイ。」

雨は急いで教室を出て家に帰った。

もう逃げない

家に帰ると母親がすぐに玄関にきた。

「雨？今日は学校から帰ってくるのはやいのね？
どうかしたの？」

「なんでもないよ。」

雨はそう言っ、母親を見ると顔に傷あとがあつた。

「お母さん！？
どうしたの！？その傷あと！！
ひどい・・・。」

「・・・お父さんがね、出て行っちゃったの。
お前らといたって楽しくないって。」

「私、お父さんなんて知らないよ。
あんなの、私の親じゃない。
私、全部知ってるんだよ。」

お金をパチンコで全部使っちゃって、お母さんのせいにしてた事。」

「雨、そんなに自分の気持ち我慢しないで。」

「我慢なんかしてないよ。」

それにさ、少しぐらい我慢しないと幸せになんかなれないしさ。

私は、いつでも我慢してるわけじゃないから大丈夫だよ。お母さん。

「

雨はお母さんに軽く微笑み、自分の部屋に戻っていった。

部屋に戻ると、雨は心の中でずっと呟いていた。

私、もう学校に行かなくていいんだ。
あんな大嫌いな学校に。

頑張って青くんとあわせようとしなくていいし、太陽くん困らせたりしなくていいし。

・・・太陽くん。

なんでさっき泣いてたの？

私が学校に来ないくらいなのに。

また私が太陽くんの事、傷付けちゃったんだよね。

本当は自分でも太陽くんの事が好きすぎてきずいてたのに。
ずっと、ずっと一緒にいたいと思った時もあったのに・・・。

太陽くん。

私、ずっと太陽くんの事、憧れてたの。

ううん、違う。

大好きだった。

一度でいいから、太陽くんとおもいきり遊んで、手を繋いで、抱きしめて。

『大好き』

精一杯笑って、そう言いたかった。

太陽くんは、私の希望だったから。

でも、もうだめだよね。

届かない想いは、ないのと同じだもんね。

だから、私の想いは初めからなかったんだって思って生きていくね。

でも・・・太陽くんと一緒に見たかったな・・・。
天気雨。

その時、家のチャイムがなった。

出てみると、太陽がいた。

「太陽・・・くん？
どうして？」

「今からなら、まだ間に合うから。
雨ちゃん！来て！！」

太陽に手をつかまれて、雨は太陽と手を繋いだまま走り出した。

それから、5分程走った。

きずいたら、太陽は足を止めていて、上からも雨が降ってきていた。

「よかった……。間に合った……。」

「え……。?」

雨がふと空を見上げると、晴れているのに雨が降っていた。

「これが……。天気雨？」

本当に、あつたんだね……。」

太陽は雨の顔を真剣に見つめた。

「雨ちゃん。

次は雨ちゃんが俺を驚かせる番だよ。

キラキラな太陽みたいに雨ちゃんが笑えるように俺がそばにいるから。」

「太陽くん……。」

私……。」

「雨ちゃん、青の事、気にしてるの？」

本当は俺も雨ちゃんが青の彼女になるの嫌だった。

雨ちゃんはどう？」

青の事、好き？」

「私、正直、青くんはちょっと……。」

「よかった。」

そしたら、遠慮なんかしないで、青から雨ちゃんを奪えるよ。

本当よかった。」

太陽は優しく雨の両手を包み、雨の唇に太陽の唇が重なった。

次の日、雨は勇気を出して学校に行った。

教室に入ると全員が驚いたように雨のほうを見た。

そして雨もゆっくり太陽の方を向いて心の中で太陽に語りかけた。

太陽くん、本当に、本当にちょっとでいいから、私に勇気をください

い。

太陽くんを信じるから。

私、もう逃げないよ。

自分からも・・・太陽くんからも、逃げないから。

太陽は雨が何を思っているのかわかったように雨に微笑みかけた。

しかし、それを邪魔するように雨を学校から追い出した気の強い女子、【土田^{つちだ} 雷加^{らいか}】が雨の前で足を止めた。

「なんで戻ってくんのよ!？」

雨は怒っている雷加の目を力強く見た。

「私はもう逃げたくないから。
学校に来るのに私に理由とか、意味なんて関係ない。」

私は私の道を歩くの！」

すると、突然、雷加は頭を抱えて大声を出した。

「違うっ！違う！違う！！

あんたに道を選ぶ権利はない！！

あんたは、ただの私のおもちゃ！！

私の操り人形！！

ただの奴隷！！

奴隷に、自分の歩く道を選ぶ権利なんてないの！！！」

すると雨も大声をだした。

「私は前の私じゃないの！！！」

〱1年前〱【奴隷ごっこ】

1年前、私は雷加と親友だった。

いや、私がただ、そう思っていただけだった。

〱1年前〱

中3の雨は卒業の準備でバタバタしていた。

「ちょっとー！！」

皆、もっとしっかりしてよ！！

卒業式まで時間ないんだよ！？」

雨はすごく気が強くて皆から少し怖がられていた。

しかし、雨の運命が変わったのは、雷加が転校してきてからだだった。

「どうも、初めまして、土田雷加です。よろしくね。」

雷加も、雨と同じような性格で、二人はすぐに仲良くなった。

しかし、ある時、雷加の一言で雨の運命が変わる事になった。

「ねえ雨、つまんないからさ、私の考えた遊びやらない？」

「えっ？雷加が考えた遊び？」

「うん！いいよ。」

「やるやる。」

すると雷加は不気味な笑みを浮かべた。

「その遊びの名前、聞きたい？」

「うん。教えてよ、雷加。」

「それはね・・・【奴隷ごっこ】」

「・・・はっ？」

「どしたのっ？雨、はやくやろっ。」

「どうやって遊ぶの？」

「このゲームは、クラス全員の協力が必要。クラスの全員に1番ク
ラスでウザイ奴を紙にかいてもらって、投票してもらうの。
1番、投票されてた奴はクラス全員の【奴隷】になるの。
ねっ？簡単でしょ？」

「わかった。いいよ。はやくやる。」

雨と雷加は教室に戻ってさっそくゲームを始めた。

雨は大声を出してクラス全員に言った。

「いい？皆、絶対書いてよ！
書かなかったら、そいつが奴隷だからね！？」

そして、皆紙に書き終わり、投票しはじめた。

誰が【奴隷】になるのか。

そのスリル感や、ワクワク感、不安感が雨の中でうずまいていた。

雨は待ちきれず、雷加に言った。

「ねえ、雷加、誰！？誰が【奴隷】！？」

雷加は少し微笑みながら言った。

「【奴隷】は雨、「空内 雨」。
あんたよ！！」

雨は焦りと不安で体の中がいつぱいになった。

「う・・・そ、嘘でしょ！？
ねえ！！冗談やめてよ！！
ねえ雷加！！」

「嘘じゃないわ、雨。」

「いやああああ！！」

頭を抱えて、うずくまりながら泣き叫んでいる雨に、雷加は言った。

「あんたは今日から、クラス全員の【奴隷】だから。毎日ね。ゲームに終わりなんて来ないんだから。」

その日から、きつい毎日が雨を襲っていった。

そのせいで、雨は内気な性格に変わってしまった。

あぐくのはてに、雨が入る高校まで雷加は追ってきた。
雨に自由を与えないために。

卒業式当日、雷加は雨に言った。

「ねえ、なんであの時、雨が【奴隷】になったか教えてあげるよ。」

「え・・・？」

「私がクラス全員に言ったのよ。
雨に投票しろってね。あいつらもバカだからさ、簡単に私の言いなりになるの。」

結果的にあんたも、あいつらも私の【奴隷】って事ね。」

「そう・・・なんだ。」

雨は悲しそうに下を向くと、どこかへ歩いていった。
そして、高校へ入って、すぐに同じクラスになってしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1391g/>

天 気 雨

2010年11月25日02時39分発行